■肢体不自由のある子どもたち・知的障害のある子どもたちへの実践事例

子どもの思いを豊かにする読書活動の実践

神奈川県横浜市立若葉台特別支援学校
司書教諭　関戸 優紀子

はじめに

本校は、2013年１月に横浜市緑区新(にい)治(はる)町から移転し、横浜市立若葉台特別支援学校（通称名・横浜わかば学園）として開校しました。同年４月に、それまでの30年の歴史ある肢体不自由教育部門（Ａ部門）に加えて、知的障害教育部門高等部（Ｂ部門）を開設し、横浜市立では初めての異なる障害種を設置する併置校となりました。

そのため本校では、Ａ・Ｂ部門に加え、さらに校内にコミュニティハウス、カフェのある本校の特徴を活かした教育活動を進めています。

Ａ部門中学部では、授業で育てたシソ、バジル、サツマイモなどをＢ部門のパン工房へ納品するコラボ授業を実施しています。パン工房のパンは本校併設のカフェや地元商店街などで販売され、地域の方々にご利用いただいています。

本校の学校教育目標「一人ひとりを大切にした教育を行い、地域とともに歩み、自立と社会参加を目指す教育を充実させます」とあるように、Ａ・Ｂ部門、それぞれの特性や児童・生徒の教育的ニーズに応じた学びを保護者、地域、福祉・医療関係者、学校運営協議会などさまざまな関係機関と連携し、目指しています。

児童・生徒の読書活動面では、横浜市立の全校に配置されている学校司書が、本校でも担任と連携を図りながら、Ａ・Ｂ部門すべての児童・生徒の読書活動を支援しています。

また、本校は、Ｂ部門図書委員会による読み聞かせや朗読劇を通して、Ａ部門との交流活動を深めた成果として、2020年度に「子供の読書活動優秀実践校・図書館」として文部科学大臣表彰を受賞しました。コロナ禍でも、読み聞かせの映像配信など工夫をこらした読書活動の交流を行っています。

今年度は、Ａ部門小学部５・６年生の１学級での取り組みを紹介します。

活用事例

＜小学部５・６年生＞

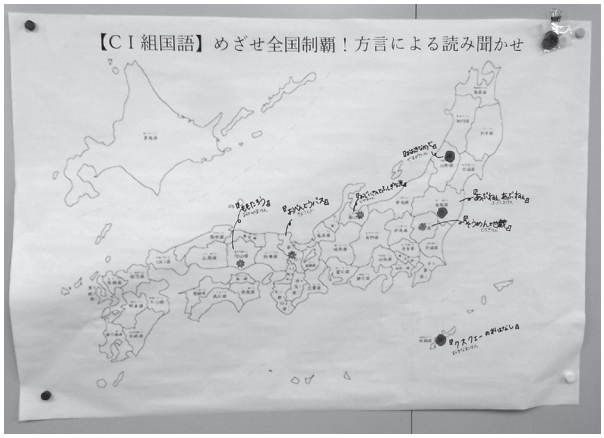
【国語科】

本学級の国語科では、言葉をイメー

ジしたり、言葉によるかかわりを受け止めたりする力を養い、日常生活における人とのかかわりの中で、自分の思いを伝えようとすることができることを目標に学習に取り組んでいます。さまざまな単元に取り組む中で、絵本の読み聞かせは、多くの時間で取り組んでいます。年度の途中で、学級の子どもの一人が関西弁に興味をもったところから、方言について着目しました。ふだんの読み聞かせでは標準語が多い中で、「わいわい文庫」には方言版の絵本が数冊あります。

『あぶねぇ、あぶねぇ』は、福島県の方言による読み聞かせになっています。「あぶない、あぶない。」という言葉の響きよりも、「あぶねぇ、あぶねぇ。」は子どもの心に響いたようです。本じゅうに何度も出てくる「あぶねぇ、あぶねぇ。」のセリフに笑ったり、全身で楽しさを表現したりする子どもたちがいました。もちろんすべての方言に興味・関心をもつわけではありませんが、『めざせ全国制覇！ 方言による読み聞かせ』と題して日本地図に読んだ場所へのシール貼りにも取り組みました。

また、「わいわい文庫」の本だけではたくさんの都道府県を制覇できないため、学校内の教職員にインタビューをして取り組むことにしました。①出身地はどこか、②方言はあるか、③方言で本読みをしてくれるか、という３点について、子どもたちがインタビューを行うにあたり、どのようにしてこの３点を伝えるのか、また、本読みの確約がとれたら、いつ読んでもらうかのアポイントメントをとることも、子どもたちが行いました。非言語のコミュニケーションを主とする子どもたちですので、取り組みには時間がかかりますが、このインタビュー、アポイントメントをとることもとても良い学習になりました。後期に入ってからの取り組みであることもあり、まだまだ全国制覇にはほど遠いですが、年度末まで取り組みを続けていきます。



また、『ばばばあちゃんのアイス・パーティ』では、絵本の疑似体験をしました。実際に学校に咲く草花や、コーヒーや、つゆ、カレー粉を思い思いに凍らせ、アイスパーティを行いました。絵本の中の子どもたちのように、本学級の児童も、自分たちが作った氷を見て歓声をあげたり、手を伸ばして

感触を楽しんだりしました。絵本の世界とつながった瞬間でした。

＜小学部６年生男子Ａさん＞

【自立活動】

Ａさんは、発声やわずかな発語はありますが、表出のおもな方法は、教員の問いかけや提示する２つの選択肢にタッチすることで、自分の思いを伝えます。内言語がとても豊かで、教員の話を聞き、よく理解することができます。小学６年生になり、年齢相応の相手との距離感や感情も芽生えている様子が見られます。毎日本読みを楽しみにしており、朝の会の前に読み聞かせをすることで、穏やかな気持ちが整うことも多く、読み聞かせが日常になっています。

そんなＡさんに「わいわい文庫」の入ったiPadを提示したところ、大変興味をもった様子が見られました。また、Ａさんのお気に入りの絵本も入っているので、まずはその絵本を見ることにしました。教員が絵本の読み聞かせをするときと同じようにじっと見つめ、よく聞いていました。「もう一回読む？」の問いかけにすぐにタッチで教員に読みたいことを伝えました。その後、給食前には「わいわい文庫」の中の食べ物の出てくる絵本を教員がチョイスして読むようにしました。

いま以上に感情や想像力を豊かにしたり、日常生活や発語につなげたりするために、たくさんの絵本にふれてほしいという教員の願いがあり、学校図書館もよく利用しますが、「わいわい文庫」の読書は、手軽さが格段に違いました。学校生活のわずかな時間であっても、Ａさんの「本が読みたい！」という思いにこたえることができました。最初は落ち着いて聞いて見続けることができなかった本も、繰り返し聞いて見ることで、気に入る本になるものもあり、読書の幅が広がってきています。

内言語が豊かであるけれど、表出の方法がまだまだ発展中のＡさんに、支援機器を使用し、自分の思いをたくさんの選択肢の中から周りの人に伝えたり、自分から話しかけたり、会話のキャッチボールをしたりするように取り組みを重ねました。その支援機器を使って、自分が読みたい本を相手に伝えるという学習にも取り組みました。９冊の絵本から読みたい本の表紙のアイコンを押すとその本読みができるということを理解し、うきうきした表情でつぎに読む絵本を選ぶようになりました。

おわりに

本校の学校図書館は、学校司書の素晴らしいアイディアと管理により、とても素敵なものになっています。季節の装飾や、肢体不自由のある子どもたちにも使いやすい工夫もたくさんされていて、学校図書館が大好きという児童・生徒が多くいます。しかし、自力移動ができない多くの子どもたちがタイムリーに図書室に行くことがむずかしい場面も多々あります。移動の観点だけでなく、体調によってもむずかしさがあることもあります。そんなときに、さまざまな姿勢や場所でも気軽に読むことができるiPadを使用した読書活動は、有効な学習の一つになります。本校では、ICT支援員にも協力していただき、子どもたちのiPadで、のじぎくアプリから「わいわい文庫」を利用できるように整備もしていることで、どのような場面や体調でも子どもたちの読書活動ができるようになっています。

また、今回支援機器と「わいわい文庫」を併用したことで、子どもの思いに深くこたえることができたのではないかと思います。

肢体不自由のある子どもたちは、自分で考えて物事を動かしていく経験が乏しくなりがちです。「読みたい！」という気持ちや、「これを読みたい！」と人に伝えられる経験は、キャリア教育の一つであると考えます。

読書は想像力が豊かになり、実体験に繋げていくこと、もしくは実体験を思い出すこともできるので、子どもたちの学習に必要なものです。一人で読むことが困難な子どもたちも、日常の中で当たり前のように、自分の好きな時間に読みたいタイミングで読書をすることができるようになったら、本当

に素晴らしいことと思います。

700冊を超える昔から親しまれているベストセラーから、マニアックなもの、タイムリーな話題の作品など、伊藤忠記念財団の工夫を感じます。長年この事業を続けてくださり、たくさんの意見を取り入れてくださり、本読みの音声にも変化を感じています。これからも子どもたちの学習意欲や余暇の広がりのために、私自身も活用方法を工夫して、多くの児童・生徒の読書活動の一助になるようにしていきたいと思います。